

関西私塾教育連盟 勉強会

新年度に向けて、効果的な集客方法とオプション講座を考える

2016年2月18日(木)
大阪産業創造館(大阪市中央区)
主催 関西私塾教育連盟

大阪を中心に関西の約40塾が加盟する関西私塾教育連盟の2月度例会が2月18日(木)に開かれた。今回のテーマは、新年度に向けた各塾の取り組み。新規募集の広告媒体やオプション授業などについて座談会形式で報告があった。出席者は開塾40年以上というベテラン塾長から若手まで幅広く、世代を超えた率直な意見交換は実り多いものとなった。

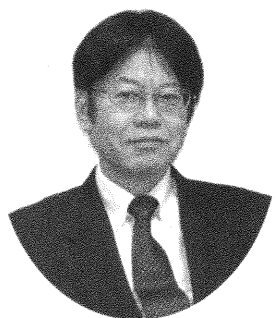
新聞購読率の低下と集客ツールの多様化

例会は清村善治理事長の「塾運営の疑問を気兼ねなく話し合え、ましよう」という声から始まった。谷口昇太郎常任理事が司会進行を務め、出席者が順に、現在の取り組みについて発言した。

最初に新年度の生徒募集方法が話題にあがった。すでに新聞折り込みのチラシを入れた塾もあるが、問い合わせはまだ少ないようだ。

新聞の購読者が減少していることから、新聞折り込みをやめてポスティングに変更したり、地域のミニコミ誌に記事を掲載したところもある。

これに対して、「本当に新聞の購読者は減っているのか？」という疑問を持った塾長は、自塾の生徒にヒアリングしてみた。その結果は大多数が新聞



清村 善治 理事長

を購読していた。ただし、この塾の募集広告は新聞折り込みがメインであることから、当然の結果ともいえる。

統計によると、新聞の購読率と世帯収入の多さは比例している。塾長は、「新聞折り込みを使うことで、生徒の選別ができていくのかもしれない」と話した。

その一方で、集客手段を紙媒体からWeb媒体に比重を置き始めた塾もある。新聞購読率は若い世代ほど低くなる傾向があるからだ。新聞折り込みだけに頼っていると募集の間口がどんどん狭くなってしまふ。

昨年1年間をかけてホームページだけでなく、ブログやフェイスブック、ツイッターを整備したという塾長からは、「この1〜2カ月でようやくWebを通じた申し込みが来始めた」との報告があった。

Web媒体は、チラシのような即効性は期待できないが、根付かせることにより安定した反応が得られる。それが口コミにもつながる。この塾長は、

「そのうちチラシは必要なくなるかもしれない」と話した。しかし、「今でも集客は、紹介と口コミのみ」という老舗塾も少なくない。いずれにしても、「チラシを入れたら生徒がどっと来る時代ではない」というのが共通の認識。塾の特性に応じて集客ツールの使い分けが進んでいる。

オンライン英会話でモチベーションアップ

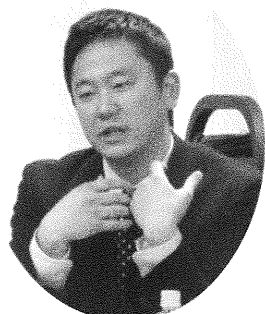
新年度の生徒募集の目玉として、新たなオプション講座を導入する塾もある。

数あるオプション講座の中でも、い最も保護者にアピールできるのは、やはり英語関連だろう。

ある塾では、スカイプを利用して、フィリピンの英会話講師とマンツーマンで会話ができる講座の導入を決めた。対象は、小・中学生で、授業は週に1回30分。導入前の12月に保護者面談で紹介したところ、良い反応が得られたという。

この講座のメリットは、日本との時差が少ないことと講師がノンネイティブであること。

塾長は、「自分で苦労して英語を身に付けた先生のほうが、生徒の気持ち理解できると思う」と話す。また、料金が比較的安価というのも魅力だ。別の塾は、アメリカ在住のネイティ



谷口 昇太郎 常任理事

ブ講師から個別レッスンを受けられる「ネット留学」のシステムを導入した。こちらは、基本的には小学1年生から6年生が対象。日本人講師によるサポートもつく。

「保護者が英語で心配しているのは、発音を含めたスピーキングとヒアリング。それをフォロワーアップできるシステム」と塾長。

この「ネット留学」が目的で塾に通っている小学生もおり、退塾防止に役立っているという。

講師に適しているのはネイティブかノンネイティブかは意見の分かれるところだが、他の塾長からはどちらの講座も「外国人と英語で話すことに躊躇しなくなる」、「英語学習に対するモチベーションアップにつながる」などの肯定的意見が出た。

中・高生対象の「速読英語」を導入した塾もある。この塾長は、「導入したものの効果が上がるかどうかわ信半疑だった」という。

システムは、最初に単語を覚えてか

ら「Reading」、「Speed Reading」へと順番に進み、長文を1・5倍速や2倍速で読む。復習では、ネイティブの音声によるリスニングの授業もある。これを英語が苦手な中学3年生が受講したところ、最初は模試の長文を全く読めなかった生徒が、1〜2カ月で読めるようになった。さらに、学校のヒアリングのテストでも満点を取ることができたという。

「導入してから短期間で受講者が30人にまで増えた」と、塾長は満足げだ。英語以外にもプログラミング教室やスマホで学習できるアプリなどさまざまなオプションが話題にあがった。これも生徒の学習に役立ちそうだが、1人の塾長から「新しいシステムを導入したときに、その魅力やメリットを保護者に納得してもらうことが大事。これからは塾にもICTの知識と営業力を併せ持つ人材が必要」という意見が出た。

地域の教育力向上を目指してミニコミ誌発刊

塾独自の企画や取り組みも発表された。

ある塾は数年前から公立高校の見学会を実施している。塾生のための企画だが、その友人も参加できる。

以前はバスを借り切って、天王寺高校や夕陽丘高校など数校を1日がかかり

で回っていた。しかし、時間と費用がかかりすぎるため、昨年は電車を利用して布施高校を訪問。塾単独の学校説明会を開いてもらった。生徒・保護者に好評で、「今年も実施してもらいたい」との要望が寄せられている。塾にとっても、塾生を啓発できただけでなく、その友人たちの入塾につながるという大きな成果があった。

ミニコミ誌を始める塾もある。これは、塾が以前から広告を掲載していた地域のミニコミ誌(全戸配布のフリーペーパー)が廃刊されることになったため、その事業を引き継ぐ形で行われ



ベテラン塾長から若手までと世代を超えた出席者による率直な意見交換の場となった

る。5月に第1号を発刊し、その後は3カ月ごとに発行する予定だ。

塾長の目的は、「地域の教育力向上。子育てに役立つ情報を掲載していく考えだ。

例えば、いま塾長が地域の子育てに関して一番気になっているのは、「子どもの睡眠不足」。最近の研究では、子どもの脳の発達には9時間以上の睡眠が必要とされている。しかし、小学生が深夜1時、2時まで起きていても気にしない親が多いという。

「親の意識を変えて、地域の学力を底上げしていきたい」と塾長は話す。当分は自費で発行し、広告掲載の申し込みがあれば受け入れる。

この発表を聞いて、ある女性塾長はすぐに「食育も大事。コンビニばかりでなく、季節のものを食べる大切さを知ってもらいたい」と提案した。他の塾長からも賛同の声があがった。

各塾からの発表が終わった後は、大阪府公立高校入試に関する情報交換が行われた。特に関心が集まったのは、作文問題と自己申告書の取り扱いについて。ここ数年、大阪府の入試制度は毎年のように変更され、情報も錯綜している。高校入試が直前に迫り、最後の追い込み時期を迎え、生徒の合格を願う塾長たちの意見交換は勉強会終了時刻を過ぎても続いた。